

2000年への教育展望 —ドイツ万博教育会議（1996）参加報告—

宮崎 俊 明
(1997年10月15日 受理)

Perspektiven für Bildung 2000 — Tagungsbericht über die EXPO 2000 in Deutschland, 1996 —

Toshiaki MIYAZAKI

1. はじめに

1996年5月、ドイツ側文部省の招待でつぎの国際会議で発表する機会をもった。「未来づくりの場—2000年ドイツ万博—教育の重点テーマ」(Zukunftswerkstatt - EXPO 2000 - Themen schwerpunkt Bildung -)である。主催したのは中部ドイツのニーダーザクセン州文部省と同教員研修・メディア教育研究所、期間は28と29の両日、会場はメッセ（見本市）都市として知られている中部ドイツ・ニーダーザクセン州の州都ハノーバーから60キロ、さらにフォルクスワーゲン本社所在地に近いブランシュヴァイクの東方約30キロのケーニヒスルター市にある同社の経営教育コミュニケーションセンターであった。

あのパリのエッフェル塔は、その開催地が1889年につくったシンボル・タワーであり、万博150年の歴史でこれほど知られているものはない。実は、日本の幼稚園のコンセプトは、1873年のウィーン万博から政府派遣者が持ち帰ったものである。また、博物館設立構想の刺激も、維新前に隠密の英国留学生として渡った薩摩藩の町田久成がパリ万博をみたことと関係する。近年では日本の中年以上の層なら1970年の大阪万博会場での岡本太郎の太陽の塔の記憶があろうし、そのときの6千4百万人という入場者数記録は、今日までなお破られていない。最近、2005年万博の開催は愛知県瀬戸市に決定している。ドイツの場合、2000年が初回、ハノーバーを中心に開催される。6月から5か月間で4千万人の入場者を見込み、その準備はすでに94年から始められている。

2. テーマ「人間・自然・テクノロジー」のドイツ的視座

今回、参加した会議「エキスポ（EXPO）2000年」は、その教育部門のテーマないしコンセプトの策定のために州の文部当局とその教育研究所、それに万博財団や大学が中心になり開かれた。その後援団体には、たとえばフォルクスワーゲン社やドイツ・テレコムの大企業、ヴェスターマン、

シュローデル、クレットといった有名な教科書・教育出版社など、あわせて10社が参加していた。加えて参加団体として特異な位置を占めたのがユネスコとそれ係わるベルリンの技術・職業教育プロジェクトの団体 (UNEVOC) である。会議の運営は、年来の知友ベルリン工業大学で労働教育論を担うヘンドリックス (W. Hendricks), 教育研究所でメディア論を担当するベルント (R. -P. Berndt) を中心に進められた。

この世界博のメイン・テーマ「人間・自然・テクノロジー」は、健康、食料、住居、環境と開発、コミュニケーションと情報、教育と文化の諸分野への将来計画、わけても環境の保護とそのテクノロジーを指導理念にした。マスタープランでは、会場をパビリオン (特設展示館) に限定せず、その外部へとびだしていくところがユニークである。そこには開発と破壊との二律背理への配慮、既存施設の利用、跡地の利用問題、とりわけ個性的、自立的な生活空間の活性化への指向があり、人間と自然の調和というエコロジカルな理念の実行に努めるからである。このことは、以前に旧東独の「国有財産」の事後処理をする信託財団の総裁をつとめた、ドイツ万博の女性事務局長ビルギット・プロイエルによる、「先端技術のショーとはしない」という発言にもうかがえよう。環境保護の先進国ドイツにとって、進歩とは「資源」の保存にほかならず、いまやテクノロジーへの多幸感や陶酔から醒めようとしている。人、自然、技術の三つのキー・コンセプトは、ドイツを越境して「ワールドワイド・プロジェクト」を設定し、「グローバル・ヴィレジ」(地球村)の時代に対応しようとする。¹⁾

地域・都市の特性を生かそうとするこのプロジェクトの推進には権限分散型、地方自治に徹するドイツの方向性が打ち出され、確認されている。たとえば、「千年のバラ」をもつヒルデスハイム市は文化保存と国際芸術祭、「笛吹き男」で有名なハメルン市は住宅環境のように重点化され、165のプロジェクトが計画されている。また、審査委員会が選定するプロジェクトの候補として、風力による海水淡水化施設 (オランダ)、イナゴマメの樹からの多彩な物産作り (ペルー)、あるいは公害のないビール醸造 (日本) などがあがっている。教育の面ではハノーバーとその近郊では青少年のためのハイテクやそれを駆使する国際理解の学習・生活経験の場の設定、ユースホステルと青少年活動の連携の重視、インターネットを利用する「エキスポ・スクール」の試み、新建築の幼稚園の設立、さらには現代ドイツの新教育を代表し、日本でも注目されているシュタイナー学校 (自由ヴァルドルフ学校) とユネスコ展との連携企画もあがっている。²⁾

3. 「学校のチャンス」－教育エキスポの方向－

今回の会議の教育をめぐるガイド・ラインには、文相ヴェルンシュテット (R. Wernstedt) により平和、環境、情報、文化、女性、道德の6項目が設定された。かれはハノーバー大学の政治学の教授だったが、社会民主党の全国教育問題研究集団の委員長から89年の旧東独崩壊の直前にニー

ダーザクセン州の文相に就任した。当時、旧東独の教育問題への同じ研究関心からそのいくつかの論著で筆者がうかがい知ったかれの特色としては、きわめてリベラルな論客であり、東独がたどったその教育の終焉段階で教師、青少年、親が直面した苦難にはむしろ共感的理解を見せている面があった。²⁾

会議の開幕には、ヴェルンシュテット文相は出席できず、女性次官ユルゲン＝ピーパー (Jürgen Pieper) がかれの以下のような基調講演「2000年万博 ―学校のチャンス―」を代読した。「自然・人間・テクノロジー」の理念は、腐食され形骸化した「デモクラシー」を自己決定と共同決定の原則に立たせてこそ現実化できる。その原則は単なる政治形式以上の社会的、知的、審美的行動で示されるものである。エネルギーや環境への問題意識を強化し、学校は世界に開かれた情報の受発信とコミュニケーションの基地になる必要がある。これによってこそ民主主義の実質的再生ははかられ、総合的かつ実践的な教養・教育概念が確認できる。学校が「未来の共同作業場」へ転換され、「学校日常のライブ」になるために「学校のネットワーキング」や「インターネットの学校」が志向される。それはグローバルな多重性をねらうものであり、現今ドイツ人の好む言い方をもって、「メイド・イン・ジャーマニーの教育」と表現された。⁴⁾

たしかに、この集りは、学会の大会や行政や企業の会議ではなかった。しかし、これらが融合・交差する形はドイツでは珍しくない。ドイツ教育学会 (DGfE) の定期大会は大統領の出席が恒例化しているし、個人経験だが、94年ベルリンでの日独シンポジウムでは女性の連邦議会議長ヂュースムート教授が比較教育学者としての基調講演をしていた。なお、この事実を権威主義や学・官・業界癒着とみるのは偏見であろう。前首相シュミットの理論や前大統領ヴァイツェッカーの雄弁は知るひとぞ知る事実であり、今回の会議の支援団体フォルクスワーゲン社の研究助成財団はドイツ教育界でもよく知られている。さらにいえば、労働組合の代表の経営陣への参加は法的に規定され、この会社のかつての会長は野党社会民主党の支持を公言したりしていた。すべてこれらはドイツ社会の一面である。

今回の発表した研究者にひとつの顕著な特徴がみられた。伝統的アカデミズムよりも工学系のプラグマチズムの立場、新設大学の参加者と社会的かつアルタナチーブな立場がめだっていた。たとえば、本拠地ニーダーザクセン州では18世紀的総合大学の牙城ゲッティンゲン大学からではなく、ハノーバー大学やブランシュヴァイク工業大学、隣接の州からは戦後に構想され社会科学分野で名声の高いビーレフェルト大学、ベルリンからも自由ベルリン大学とフンボルト大学の参加者はなく、むしろベルリン工業大学から職業教育論を担当ヘンドリックスとグライネルト、さらに異文化論のシュタインミュラー副学長、また、旧東独圏の新設ポツダム大学からは環境教育学の学部長などが出席していた。ここにも大学の画一性や大学間格差を排するドイツの個々の特徴がうかがえた。

4. 「教育の国際シーン」－カメルーン、日、米、露、ユネスコの声－

「エキスポ・スクール」のプロジェクトは、外国の教育事情を視野に取りこんで「万博」の名実を確保しようとした。このため、カメルーン、日本、アメリカ、ロシアといった外国から招かれた者とユネスコ側からの各1名の計5名のゲストが、その順番に「教育の国際シーン」のテーマのもとに国情、文化差異、とくに直面する問題点などをそれぞれ20分間の報告をするプログラムが実行された。

まず、滞独10年、いまは故国カメルーンに帰ってテロの危険とすらし向きあいながら、その連絡先をジャウンデのDAAD（ドイツ学術交流会）におきつつ開発教育に従事するジーモ（D. Simo）教授が話した。かれは、単にアフリカのみでなく世界総人口の4分の3の第3世界からの声を聞かせるために招かれたとあってよい。それはひとつの訴えであった。テクノロジーは第3世界に豊かさをもたらす以上に経済と文化の両面で収奪の具になっていないか。はたして、この「文明化の戦い」では未来は開かれていくのか、と問うた。アフリカが内在的、伝統的にもつ知と技（わざ）の文化は脅かされ、その原型と近代とのあいだの亀裂は、一方でかれらの心理的ブロック化をおしすすめ、他方で識字レベルの教育課題を大きくして、青少年のみならず成人の社会教育に緊迫した問題となっている。かれが申し立てた、アフリカにおける知と技術の教育・学習機会の不足は、先進国への抗議ともとれた。事実、東独の崩壊、ソ連の解体、さらにユーゴスラビアの紛争といったヨーロッパ内部の問題のためにアフリカに対するヨーロッパ側の関心や対外援助は後退をみせていると告げた。かれは21世紀への教育でなくその題目のごとく、「20世紀の出口のところの教育」を語った。⁵⁾

主催者側が筆者に求めてきたのは日本の、学校教育の現状の光と影、青少年の意識と行動、その教育の現実と将来展望や戦略の紹介である。⁶⁾ 経済とテクノロジーを中核にした「ジャパン・モデル」はドイツの経済界やアジアの発展途上国はともかく、その青少年の社会化では、政治的で個人主義的なヨーロッパ圏のその範例にはなりがたい。それについての文献や会議資料はドイツではこと欠かないし、むしろ増えつつある。⁷⁾ ただ、今回の会議の性格からか、日本の文部省がいう学校へのニュー・メディアの導入計画は、参加者とマスコミを刺激した。

ドイツ側の最大のゲストとなったのは、いうまでもなくロシアである。ロシア教育アカデミーの事務局長として参加したネチャーエフ（N. Nechaev）教授は心理学者だが、自信にみちてその国がもつ知的、技術的潜在能力と蓄積を語り、国際間の協調を求め、ロシアへの支援を訴えていた。加えて、旧東独圏からの通訳をともなつての参加は旧ソ連と旧東独との関係がもつた威光もみせつけていた。

このロシア代表とはむしろ対照的だったのがアメリカからのヘルンドン (R. Herndon) である。アフロ・アメリカンのかれは国民ヘッド・スタート協会 (NHSA) の会長として、アメリカ社会のマイノリティや言語の多様性がみせる問題点をいいながら、協会の広範な活動について将来への希望と子どもへの信頼をもって明るく語り、それがよい印象をあたえていた。かれから贈られたその協会の刊行物のひとつ『サクセス・ストーリー』には200近い事例が紹介されているが、それは日本で知られるテレビ番組「セサミ・ストリート」の知的・言語的差異の縮小物語の類ではなかった。むしろボランティア活動が支えるさまざまな発達援助が多面的な成熟社会の一面をうかがわせた。もちろん、中途退学者や青少年の犯罪の増加という、アメリカ社会の底辺にひろがる影の部分が深刻な問題であるとしたのはいうまでもない。

ユネスコを代表してパリ本部の教育部長出席リッソム (H.-W. Rissom) が出席した。かれは、自然・文化保護やインターネット・コミュニケーションへのドイツ万博の推進方向も、それが地球的、人類的な規模で実質化されるためには教育機会の貧困層への手立てがまず不可欠だとした。いま、世界に9億の非識字の人があり、1億3千万の子どもに学校がなく、1億人の中退者のいることなど、統計を示しながらむしろはっきりと 第3世界の声を代弁した。

5. ラウンド・テーブル「人間・自然・テクノロジー」

午後の部ではヘンドリックスと「科学の世界」誌の編集長との司会のもと、参加者全員の約80名がフロアを文字どおりラウンド・テーブルの形で4人の問題提起者を取り巻き、テーマ「人間・自然・技術」をめぐる質疑をふくめ2時間半にわたる論議が展開された。まず、ベルリン社会研究センターの女性ディレクターが、情報とコミュニケーションのための新しいテクノロジーの登場、女性の政治的、文化的、社会的なモビリティの増大などで、とくに女性の就業活動の需要が高まり、その「労働の将来」はいま新たな「学校教育のチャンス」になっている、と説いた。次に、科学技術分野の研究助成財団として有名なフラウエンホーファー協会の会長が「崩壊する工業社会」の教育上の問題と課題についてむしろ現実的に語った。労働市場の雇用構造の変化は失業者の増加を生み、このために現職者の補充-促進教育の拡充が必要だとする趣旨を展開した。

このふたりの具体的な提言に対し、ポツダム大学とフランクフルト大学からのふたりの提言者や参加者には、むしろ文化形成とテクノロジーの教育の基礎的な概念の枠組みを検討する必要があるとする主張がめだった。つまり、認識と技術との断層、一般教育(養)ないしその資質と技術的職業教育の落差こそが埋められるべきである。現代における人間、自然、技術の統一的な把握の困難さが、V. v. ヴァイツェッカーのいうように文明の危機を呼びおこし、アドルノが省察したようにモダンの歴史はネメシス〔罰〕のまえにあるとする声が聞かれた。救済されるべき人間と自然は、技術と啓蒙のむしろ裏面を直視することで教養として実質化される、と主張された。

ここでもユネスコ側は、技術と経済は第1世界に占有されていること、第2世界は第1世界に追いつこうとしかかえこむ問題の解決を先送りしていること、そして第3世界はこのふたつの大きい流れに取り込まれていくだけだ、と訴えた。この構造にはフロアにいた旧東独からの参加者もいったように、旧西独中心主義、ヨーロッパ中心主義として、文化領域も含めて排他と従属とがはたらく。いまや、第1世界にはその「新しい封建制」の抑止と「新しいポスト・モダン」への覚醒が必要である。その点でドイツ万博は、たとえば、行き先が同じで遅速が固定されたふたつのクラスの列車が発着するところではない。むしろ、反省と希望とが会おう「コミュニケーションのプラットフォーム」となることに開催の意義がある。

6. 教育世界の変容と再構築 — 講演とワーキング・グループ —

「未来づくりの場」としての万博をねらうために、初日の夜と二日目の冒頭の時間帯で演劇やロボット制作のプレゼンテーションがあった。そのキーワードは、コミュニケーション、文化の多様性と接触、エコロジー、開かれた学校、学習中心、すなわち「学校のネットワーク」である。そこでは、教室から出て現地入る「飛ぶ教室」(ケストナー)の学習の仕方からさらに転じて「世界が学校になる。」しかし、生徒や学生はそうなる前に男女の青少年であって、かれらの行動、意識、感覚、価値尺度など、青少年文化の構造変容は学校を揺さぶり、教育学にニューウェーブが押し寄せている。この青少年のポスト・モダンの生態をビーレフェルトでパーケラのもとにいるフェルヒホフ(W. Ferchhoff)がくっきりと描きだした。⁸⁾

つづいて参加者は万博の教育テーマに向けて3つのワーキング・グループ、1)「学校と教育諸施設の措置、プロジェクト、計画」2)「展示のコンセプトからプロジェクトのアイデアまで」3)「国際的プロジェクトのためのアイデア」に分散し、座長にはそれぞれ文部省、万博財団、自主グループの関係者をすえて3時間の設定で分科会が開かれた。予め届け出られた参加者リストではこの3つのグループは23、20、15人で構成され、筆者は他の外国人ゲストと同様、3)に出た。この3つのガイドラインは、「理解と協力」を政治対立や経済競争を越えて、なかんずく教育と言語の多様性、メディアの多元化のもとで推進することにあつた。いいかえれば国家意識とその利害の抑制、国境のボーダーレス化、民族とその文化、社会変動、これらのなかの問題と課題の共通確認が基本的な方向性である。

これらを教育場面で具体化するためには、教科書記述の改善や学校博物館の展示での創意、青少年・教師間の文化差異の交流、生徒の学習と教員の研修の国際間の提携、旅行や一時的滞在の実践など、これらを推進すべきだとする提案が聞かれた。

メキシコにあるドイツ人学校の一教師は、学校教育にありがちな「文化官僚主義」を警戒しながらインターネット上で広範な学習を促進した成果を紹介した。ロシア側は、とりわけ露・独の言語

間や潜在能力の高い理数科の交換学習など、ことに旧東独圏を意識して熱心に提案していた。事実、ドイツの連邦文部省とロシアのそれとのあいだでのインターネットによる生徒の学習交流の協定がもう締結されている。ただ、多文化世界が相互にクロスした「理解と協力」は、メディアの多様・多方向性に依拠するとしても、民族間や、それぞれの社会内部の緊張、世代ギャップ、障害者、女性、暴力、少数者の問題などが看過されるべきでない。その点で会議は、アメリカのヘッド・スタート・プロジェクトのヨーロッパ諸国への導入の可能性を問いかけていた。

教育文化の「理解と協力」は、それぞれの固有性と普遍性との両面から推進されるべきだが、日本のそれには、自然への独自のまなざしや美意識、それと重なる宗教・道徳意識の基層がもっと注目されてよいだろう。近代学校の制度モデルと学校への共同体的な期待とは必ずしも一致せず、現代社会はそれに苦しんでいる。それだけに日本人の自然観や社会像を例にとって、現代の環境問題や学校・地域・家庭に親和的な関係を回復するヒントがないか、という発言もむしろおどろくべきことに外部から聞くことができた。現代の日本人の外国語能力の低さや日常的コミュニケーションの硬さは自他ともに認めざるをえない現実だが、その根は深い。この問題を学校教科の改変、新技術の導入、トレーニングなどで解決できるとする見方は、文化と歴史の層を理解していないうらみがある。なによりも、最小限、学校と青少年に自由と開放を実感させ、からだとことばの表現の基盤を保障する方が重要だろう。

第3グループの座長クヴィラン (M. Kwiran) は、プロテスタント系の宗教教育学の教授だった。かれが発行・編集人として年2回刊行する「パノラマ」でパウロ・フレイレ特集があり、その執筆者がボフム大学のコメニウス研究室の面々だと知ったときはおどろきであった。クヴィランは、イエスの非神話化論者ブルトマンの名をもつ財団からその学校改革プロジェクトの支援を受けているという。イリイチやシュタイナーにしてもそうだが、フレイレの日本での受容や評価の仕方には、このような神学的、宗教的な思想の深層やコンテクストに触れないでいるために実用的表面的な限界をなしとせず、その理解や受容を十分にしないだろう。

7. 会議の最終総括にみる実施提案

他のグループも含めて具体的に提起された課題は、ヘンドリックスと研究所の女性所長 (D. Kratzschmar-Hamann) のふたりではかられた最終総括 (プロトコール) となったが、抽出して列記すれば、以下のごとくであった。⁹⁾

1) 開かれた学校：

- (1) インターネット上での「エキスポ・スクール」からの発信と外国の学校からの受信
- (2) 教育よりも学習、教師よりも生徒の立場の重視

2) 時代なかで変動する21世紀の学習形態：

- (1) 情報・コミュニケーション技術を補助手段とした学習の広域化
- (2) 「学習と生活の家」としての新しい学習環境と学校建築のシナリオの作成

3) グローバルな時代に求められるドイツの教育政策の問題と課題：

- (1) 民族間の平和の維持とその積極的関係の構築
- (2) 外国の事例の参照
- (3) ナショナリズムとヨーロッパ中心主義をこえた世界への責任という歴史意識
- (4) 世界各地の学校との友好親善協定の締結
- (5) 危機にある青少年への対処

4) 多文化世界のなかの生活：

- (1) 世界の文化的多元性の自覚
- (2) 大都市の教育と地方の教育の対立問題への対処
- (3) 地球社会での生活の前提条件としての外国語学習の推進
- (4) インターネットを補助手段とした学習グループによる「教室の多国籍化」
- (5) 非識字問題と文字言語の能力低下への対抗戦略
- (6) 文化的、政治的、経済的流出者の増加への対処
- (7) ユネスコ、WHO、その他国際諸機関の学校と提携したプロジェクトの実施

5) 展示の事例：

- (1) 職業教育をふくむ優秀な教育・学習実践にたいする「エキスポ賞」の設定
- (2) ドイツ職業教育史センターの設立
- (3) 遊びを導入した創造的学習のフリースペースの設定
- (4) ベルリン交通・技術博物館の理科実験の万博会場への移設
- (5) 図書展示—ゲーテンベルクから電子本まで
- (6) ドイツの教育についてのマルチメディアによる情報提供
- (7) 世界の学習メディアの紹介
- (8) 青少年を対象にした「青少年研究賞」の設定
- (9) 300年まえのピョートル大帝下ロシアにみる東西ヨーロッパの知識—教育の移動の展示
- (10) 「人間・自然・技術」の未来についての美術、音楽、文芸分野での生徒のコンクール、国際生徒劇場、マルチメディア・フェスティバルの開催
- (11) 印刷・電子メディアによる青少年と幼児のための万博案内の実施

なお、これらの提案や構想は、96年度学年末段階のものであり、推進側のタイムスケジュールと実施項目の概略とのすりあわせが進められている。主宰する州文部省と研究所の報告では、会議後97年上半期までの1年間で、2万5千部の広報を配布し、「学校参加」につとめている、という。

計画では、中等教育レベルを中心に、ニーダーザクセン州全体として約25の機関の参加が予定されている。このため、学校の時間割り編成、教科統合、学校外組織との連携およびそのプランとの調整が進められている。その一方で教育機関や個人からのプロジェクトの応募をはかり、それにたいする賞金・予算措置が計られている。¹⁰⁾

いま、地球上の教育は、二重のねじれをみせているといえよう。一方でひとはこどもの死と貧困、人権の抑圧、少数者とその差別などの問題のまえにあり、他の一方で学校教育は不足と過剰の両面で深刻化しているからである。国家単位の経済指標や技術教育の推進のみでは格差を増幅させ、それがむしろ教育世界の疎外要因となる面をはらむだろう。端的に言えば、アフリカと日本には人権の、アメリカにはマイノリティの、ロシアにはその潜在力が今日直面する困窮や言語の、といった問題も「教育の国情」として示された。ドイツに特徴的だったのは、問題点よりも課題の提示に傾斜しすぎていたとはいえ、エコロジーやフェミニズムの課題、ヨーロッパの国家連合（EU）への指向、職業教育と女性の進出の活性化、科学技術政策の方向と課題、青少年の行動・意識変容への教育的対応などである。そこに参加者は、「世界の教育シーン」とこの万博の基本概念の「人間・自然・テクノロジー」の方向性を読み取ろうとした。

会議の第1日目の模様はテレビ（ZDF）が夕刻の全国ニュースで流していた。後日、コピーで入手した新聞でも数紙が会議の意味や前後のエピソードを報じ、たとえば、小さいがドイツ最古で1705年創刊という地方紙「ギルデスハイマー」は、アフリカ、ロシア、アメリカにおける学校中退者の増加に反して、豊かな日本の学校の「工場化」と「試験地獄」と生徒の自殺を書き、これらが万博のコンセプト「学ぶ学校」のもつ重い課題だといひ添えることも忘れていなかった。¹¹⁾ 会議の1週間後、ベルントとヘンドリクスとの手になる上記の会議メモが、発表者が事務局に提出していた資料（部分）や新聞報道記事とともに送られてきた。¹²⁾

8. 会議の前後

会議の前々日、26日はアメリカからのヘルンドン、アフリカからのジーモ、それに筆者との外国組3人は研究所のあるヒルデスハイムから50キロ、ゼーセンのホテルに泊まった。翌日の午前中、われわれは、ベルリンのドイツオペラ劇場の演出家である、ベルントの弟により、かれと仕事をともするアフロ・アメリカンのジャネット・ウィリアムスとともに由緒ある中世の帝都ゴスラーに案内された。その午後は、ベルリン人ベルントのもつ田舎の農家を改造した別宅で半ば公的半ば私的なパーティがあり、会議の推進役や研究所の裏方、村長までがやってきた。その二階家の外壁には万博の2種の垂れ幕どころか、内部の壁面には1メートルはあろうあのマルクスの額が掛けてあった。ロシア教育アカデミーの首脳への「演出」がここにもあった。それにしても会議の開幕前に、ふたりの明るいアフリカン・アメリカンとひとりのヨーロッパ的知性を身につけた、合せて3人の

アフリカンに出会い、それには羨望や敬意を覚えざるをえなかった。ベルントによれば、われわれには次の日からのための「ウォーミング・アップ」の趣向だったという。新聞もそう見出しをつけていた。

2日間の会議が終了した夕方、外国側ゲストは会議を運営した関係者や裏方とともにドイツで最初の乗り合いバスを製造したブッシングの生家にある記念博物館とそこでの民俗料理の集りに案内された。そこでは今回のフォルクスワーゲン社の会議場のテラスの一部が、樹齢2百年ほどの1本の大木を保存するため円筒型のガラス張りですつらえていたのと同じエコロジーの発想、つまり「産業環境革命」を志向するイベントが待っていた。ドイツの職業教育制度の通例として学校は企業と提携するが、マン社の教育センターの指導員とそこに派遣されている生徒からなるチームの6人がやってきた。そして、かれらが廃車の部品で組み立てた大型バスをそのキーと車検証とともにロシア教育アカデミーのネチャーエフ事務局長にプレゼントしたのである。ネチャーエフは、このバスをモスクワの養護学校に寄付し使用させる、といった。この実現には同席していた州議会議員のバックアップがあったと新聞は報じている。ドイツ側には国際親善、さらにいえば旧東独の国境開放への民間からのユーモラスで遅ればせの謝意だったかもしれない。一方ロシア側には職業と環境との両面の教育の実例、あるいはチェルノブイリを連想させたかもしれない。

ヒルデスハイムにきたのを機にドームと聖ミカエルのふたつの教会を再訪した。後者には有名な「千年のバラ」があり、戦後、ユネスコの資金で再建された経緯をもち、いまは世界遺産に登録されている。それに大学にクロアー (E. Cloer) をはじめて訪ねることができた。かれは今回の会議のヴェルンシュテット文相とともに『旧東独の教育学』を編集し、つとにその領域の専門家として通っている。¹³⁾ このあとマゲデブルク大学にゴルツ (R. Golz) 訪ねた。さらにベルリンに入って、フンボルト大学の宿舎に1週間いて、自由ベルリン大学、教育史研究図書館、日独文化センター、近在のポツダム大学を訪ねた。旧東独の評価にはクロアーと対照的なテノルト (H. -E. Tenorth) にペスタロッツ記念シンポジウムの半年後に再会できた。気になりながら会えなかったのは、旧東ドイツ教育アカデミーの元総裁ノイナー (G. Neuner) である。94年のかれとのインタビュー録音の起こしでテノルトの世話になりながら、実はその自伝的著書の上梓を待たねばならなかったからである。また、ポツダムのシュミット (H. Schmitt) は次のふたつの点で意気軒昂だった。ひとつはかれがドイツ教育史学会に委員長に就任したこと、もうひとつは1996年がペスタロッツと同様、カムペの生誕250年にあたり、その展覧会がこの教育家の活動地ヴォルヘンビュテルのアウグスト公図書館とブランシュヴァイクの州立博物館で開催されることになり、その豪華ともいえるカタログをかれが中心で編んでいたからである。連邦文相が序文を寄せているのもそのことはわかる。もちろん、ブランシュヴァイクで恩人ホーフ (D. Hoof) に会って夜更かしをし、マールブルクではスチュービヒ (H. Stübig) 宅で泊めてもらって、10月の新学年度からカッセル総合大学に赴任す

る夫人とともに歓談，翌朝そこからさして遠くないフランクフルト空港から帰国の途についた。¹⁴⁾
(15. Okt. 1997)

参照資料

- 1) EXPO 2000 Hannover GmbH / Niedersächsisches Ministerium für Wirtschaft, Technologie und Verkehr (hg.) 1995 : EXPO 2000 Hannover – Dokumentation des Verfahrens – Stadt und Region als Exponat; Niedersächsisches Kultusministerium / EXPO 2000 Hannover GmbH / Niedersächsisches Landesinstitut für Fortbildung und Weiterbildung im Schulwesen und Medienpädagogik (NIL) (hg.) 1996 : Welche Schule braucht die Zukunft unserer Welt ?.
- 2) Niedersächsisches Landesinstitut für Fortbildung und Weiterbildung im Schulwesen und Medienpädagogik (hg.) 1997 : Welche Schule braucht die Zukunft unserer Welt ?.
- 3) 宮崎俊明 1990:東ドイツ教育の終焉（Ⅱ）—改革にむけて—, 鹿児島大学教育学部研究紀要42, 199 – 209頁 .
- 4) Wernstedt, R. 1996 : EXPO 2000 – Chancen für die Schule – , (unveröffentlicht).
- 5) Simo, D. 1996 : Die Ausbildung am Ausgang des 20. Jahrhunderts, (unveröffentlicht).
- 6) Miyazaki, T. 1996: Das japanische Bildungswesen—Entwicklungen, Problemlagen, Perspektiven—, (unveröffentlicht).
- 7) 宮崎俊明：ドイツの教育研究の現況，鹿児島大学教育学部研究紀要 48, 1997, 103～167頁 .
- 8) Ferchhoff, W. : 1996 : Zur Lebenssituation von Jugendlichen in der zweiten Hälfte der 90er Jahre, (unveröffentlicht).
- 9) Berndt, R. -P. / Hendricks, W. 1996 : Zukunftswerkstatt EXPO 2000 (Tagungsbericht).
- 10) 2)
- 11) Gildesheimer Allgemeine Zeitung (31. Mai 1996).
- 12) Vogt, P. 1997 : Die Welt wird zum Klassenzimmer, in: Bundesministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Technologie : Prospekt – Zeitschrift des BMBF – , S. 9～10.
- 13) Cloer, E. / Wernstedt, R. (hg.) 1994 : Pädagogik in der DDR.
- 14) 7)

欧 文 目 次

Toshiaki MIYAZAKI

Perspektiven für Bildung 2000

—Tagungsbericht über die EXPO 2000 in Deutschland, Mai 1996, Königslutter—

INHALT :

- 1 : Vorbemerkung
- 2 : Deutsche Gesichtspunkte zum Thema „Mensch / Natur / Technologie“
- 3 : „Chancen für Schule“ —Richtlinie der EXPO für Bildung—
- 4 : „International Scene of Education“ —Apelle aus Kamerun, Japan, USA, Russland, von der UNESCO—
- 5 : „Mensch / Natur / Technologie“ am runden Tisch
- 6 : Transformation und Rekonstruktion der Erziehungswelt —Vorträge und Working Group—
- 7 : Konkrete Vorschläge —Agenda des Abschlußplenums—
- 8 : Veranstaltungen vor und nach der Tagung

in : Bulletin of the Faculty of Education, Kagoshima University, Studies in Education, vol. 49,
1997, S. 187-197.